上越教育大学研究紀要　第29巻　平成22年２月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 29, Feb. 2010

児童期にドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，音楽番組をよく見ることが，思春期の子どもの社会的・心理的不適応に及ぼす縦断的影響

角　谷　詩　織*・無　藤　　隆**

（平成21年９月８日受付；平成21年11月２日受理）

要　　旨

本研究では，テレビ番組の種類として，特に，日本民間放送連盟から放送モラルについての要請が出された経緯をもつ，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の視聴が，子どもの社会的・心理的不適応を高めるのかについて検討する。首都圏40㎞圏内から無作為抽出された，第一回調査時の小学５年生1,006名を対象とし，2001年２月～2004年２月の間，毎年１回の縦断的調査を実施した。テレビ要因の他に，子どものメディア所持，テレビゲーム，スポーツや勉強の得意不得意，担任教師との信頼関係，生活習慣，学校の楽しさといった，子どもの社会的・心理的適応に重要な影響力をもつとされている要因を含めた分析を行った。縦断的因果関係を検討するに当たり，小学５年生から小学６年生，中学１，２年生へ，小学６年生から中学１，２年生，中学１年生から中学２年生への縦断的偏相関係を求めた。分析の結果，長期的に子どもの社会的・心理的不適応を高める要因が見出された。児童期後期におけるドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の視聴は，特に中学生になってからのルール違反傾向や不安傾向を高める要因として機能する可能性が示唆された。「よく見る番組」の要因は，小学校５年生から中学２年生にかけて，社会的・心理的不適応状態に比較的安定した影響力を示したことから，その影響が無視できないものであることが推測された。

KEY WORDS
児童期，思春期，テレビ番組，社会的・心理的不適応，縦断的影響

１　問題・目的

１．１　視聴番組の影響を検討する意義

近年，パソコンや携帯電話などを始め，多種多様なメディアが生活に根づき，子どもたちも，豊富なメディア環境のもとで日常生活を送っている。しかし，テレビはいまだに子どもたちにとって主要なメディアである（Arnet, 2007）。特に日本の子どもたちの１日あたりのテレビ視聴時間は，2001年から2004年まで「２時間ぐらい」が30％～36％前後で最も多く，ついで，「３時間ぐらい」が24％～29％と，過半数が１日あたり２～３時間程度テレビを見ていることが示された（放送と青少年に関する委員会，2005）。TIMSS2007でも，日本の小学４年生の１日あたりテレビ視聴時間平均が2.0時間という結果が得られ（国立教育政策研究所，2008），わが国の子どものテレビ視聴時間は２時間程度で安定しており，諸外国と比較しても，生活に占めるテレビの割合は大きい（国立教育政策研究所，2008）。

一方，テレビは，子どもの社会的・心理的適応に影響を及ぼすリスク要因の一つとして小さいながらも重要な影響をもっている（Muto，Sumiya，& Komaya，2005；角谷・無藤，2003）。子どもの社会的・心理的適応に影響を与えるテレビの要因は様々にある。たとえば，視聴時間，視聴形態，暴力シーン，コマーシャルなどがある。Anderson, Huston, Schmitt, Linebarger, & Wright（2001）は，乳幼児期のテレビ視聴が青少年になってからの社会的・心理的適応に与える影響を検討する中で，視聴時間などをテレビのメディア要因，暴力シーンやコマーシャルなどをテレビの内容要因とした。そして，内容要因の影響が顕著に表れたことを示した。 本研究では，内容要因に分類されるテレビ番組の視聴が，子どもの社会的・心理的不適応を高めるのかについて検討する。

番組の種類はテレビの内容要因の中に含まれる。しかし，その影響を検討した研究の多くは，暴力シーンの視聴と社会的逸脱行動との関連（Anderson, Berkowitz, Donnerstein, Huesmann, Johnson, Linz, Malamuth, & Wartella, 2003）や，アルコールや煙草のコマーシャルが青少年のアルコールや煙草の摂取に与える影響（Austin & Knaus，2000），教育番組の学業成績への影響（Anderson et al.，2001）を検討したものであり，テレビ番組のジャンルの影響は直接検討されていない。これは，これまでの視聴番組の影響を検討する観点が，テレビからの直接的なメッセージやシーンの影響に限定されたものであったためと考えられる。この観点からすると，ドラマというジャンルに同様に含

*学校教育学系　　**白梅学園大学

まれる番組でも，暴力シーンの多いドラマであるほど，青少年の日常生活での攻撃行動を高める可能性があるという示唆を与えることとなる。

しかし，今日では，番組製作上のモラルが強く求められたり，番組の流行りの傾向が強くみられるため，たとえば，ドラマというジャンルに含まれる番組間で暴力シーンの量に極端な差が生じることはまれである。むしろ，特定の番組への興味関心（Hawkins, Pingree, Hitchon, Gorham, Kannaovakun, & Gilligan, 2001）や，パーソナリティや日常のストレスなどの受けとめ方と視聴番組の選び方や受け取り方との関連（Weaver，2003）などにみられるような，番組の種類を大きな分類枠とした検討が必要となる。

また，社会や家庭での実際的な課題を考えると，番組における暴力シーンの量というよりはむしろ，番組全体の雰囲気や視聴番組のジャンルによる影響の検討が求められる。さらに，ある特定のジャンルのテレビ番組を見ている子どもが，その後，社会的・心理的な適応上の問題を高めることがあるとすれば，子どもの視聴番組を，社会や家庭において一考する具体的な施策につなげることが可能となるだろう。

そこで，本研究では，テレビ番組の種類として，特に，日本民間放送連盟から放送モラルについての要請が出された経緯をもつ，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の視聴が，子どもの社会的・心理的不適応を高めるのかについて検討する。

１．２　ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の特性

小学生がよく見る番組としては，アニメが最も多く，小学５年生男子では約90％，女子では約78％，小学６年生男子では約85％，女子では約77％が「よく見る番組」としてアニメをあげている（放送と青少年に関する委員会，2005）。この傾向は，欧米でも同様にみられる（Comstock & Scharrer，2006）。

アニメと，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組とは，以下の点で異なる特性をもっている。まず，アニメが午後５時～８時に放映されることが多いのに対し，ドラマ等の番組は，午後８時～９時以降に放映されることが多い。さらに，番組製作サイドの意識からもその特性の違いがみられる。2008年６月に，日本民間放送連盟が公表した，各テレビ局「『青少年に見てもらいたい番組』2008年春」では，東京地区の主要５局が挙げた番組の中で，「学校へ行こう！MAX」と「題名のない音楽会」以外に，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，音楽番組は含まれていない。さらに，ドラマ，バラエティ，トーク番組，音楽番組は，日本民間放送連盟から1999年６月に出された「『青少年と放送』問題への対応について」の中で，「ドラマなどの番組のなかで，他人の人格を認めることの重要さを訴えるなど，情操面の啓発に力を入れていただきたい」，「バラエティ番組や学校を舞台とした番組などで，『いじめ』を肯定的に取り扱わないよう留意していただきたい」，「人気タレントの言葉づかい，振る舞いについては，児童・青少年に模倣されやすいので，慎重に取り扱っていただきたい」のように，具体的に番組製作上のモラルが求められた経緯をもっている。このような動向の背景には，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，音楽番組が，青少年の社会的・心理的発達への影響が無視できないものと認識されているという実態がある。しかし，その影響が，実際に青少年のどのような側面に対するものであるのか，また，どの程度の期間影響力をもつものであるのかについて具体的に検討したものはない。

そこで，本研究では，2000年の小学５年生1006名を対象とした４年間の縦断データをもとに，思春期前期の子どもの社会的・心理的不適応に，ドラマ，バラエティ，トーク番組，・歌・音楽番組が長期的影響を及ぼすのか検討する。

１．３　本研究の流れと検討課題

まず，小学５年生が中学２年生になるまでの社会的・心理的不適応状態がどのように変容するのかを捉える。角谷・無藤（2003）に基づき，社会的不適応状態として「ルール違反」行動に関する変数を，心理的不適応状態として「不安」に関する変数を用いて検討する。

続いて，子どもの社会的・心理的不適応に影響を与えることが予測される要因について，「よく見る番組」，「それ以外のメディア要因」，「メディア以外の要因」に分けて，それぞれ4年間の様相を捉える。

その上で，どの要因が，後の社会的・心理的不適応状態を高めるのか，「よく見る番組」，「それ以外のメディア要因」，「メディア以外の要因」に分け，縦断的に検討する。

なお，本研究では，無作為抽出法により調査対象を得た。そのため，本研究から得られた結果は，母集団の特性を反映したものとして解釈することに耐え得る結果である。

2　方　　法

調査対象：首都圏40㎞圏内から無作為抽出された，第一回調査時の小学５年生1,006名（女子490名，男子516名）。

調査時期：2001年２月～2004年２月。

調査方法：毎年２月，面接調査法を実施（計４回）。

調査内容：角谷・無藤（2003）でリスク要因として抽出された項目を分析に用いた。不適応に関する変数として，ルール違反傾向に関する項目，不安傾向に関する項目を用いた。さらに，メディア要因として，子ども専用のテレビ所有，携帯電話所有，良く見る番組，テレビ視聴時間，番組での暴力シーンに対する意識，テレビの必要性，テレビゲームで遊ぶ時間，テレビゲームの必要性などの項目を用いた。また，学校，家庭，自己，不安状態の要因を分析に用いた。分析に用いた要因は24要因となった。具体的な質問項目及び回答形式をAppendix 1に記した。なお，本研究で各要因の構成項目数が少ないが，無作為抽出法を採用することにより，回答の妥当性を高めた。

3　結果・考察

3.1　小学５年生から中学２年生のルール違反・不安の変容

ルール違反と不安の得点について，学年，性別による差を検討するため，学年を被験者内要因，性別を被験者間要因とする二元分散分析を行った（Table 1）。

Table１　性別のルール違反，不安の平均値（*M*），標準偏差（*SD*），および分散分析結果

		男子		女子		交互作用		主効果（学年）			主効果（性別）		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*df*	*F*	*df*	*F*	多重比較	*df*	*F*	多重比較
ルール違反	小５	2.59	.67	2.65	.62	(3,2103)	6.46***	男子 (3,1092)	37.63***	小5＞小6＞中1＞中2	(1,560)	1.33n.s.	
	小６	2.52	.71	2.47	.69						(1,560)	.03n.s.	
	中１	2.35	.74	2.19	.68			女子 (3,1011)	90.47***	小5＞小6＞中1・中2	(1,560)	6.52*	男子＞女子
	中２	2.16	.79	2.09	.71						(1,560)	1.64n.s.	
不安	小５	2.68	.57	2.69	.56	(3,2142)	10.12***	男子 (3,1116)	16.48***	小5＜小6・中1・中2，中1＞中2	(1,560)	1.03n.s.	
	小６	2.86	.56	2.65	.66						(1,560)	14.61***	男子＞女子
	中１	2.88	.57	2.57	.63			女子 (3,1026)	6.28***	小5・小6・中1＞中2，小6＞中1	(1,560)	30.79***	男子＞女子
	中２	2.81	.59	2.50	.59						(1,560)	38.80***	男子＞女子

$^{*}p<.05$，$^{***}p<.001$

分析の結果，ルール違反について有意な交互作用がみられた（$F(3, 2103)=6.46$，$p<.001$）。下位検定の結果，男子では学年の有意な主効果がみられ（$F(3, 1092)=37.63$，$p<.001$），学年があがるにつれ，ルール違反得点が低くなった。これは，学年があがるにつれ，ルール違反傾向が高まることを示す。女子でも学年の有意な主効果がみられた（$F(3, 1011)=90.47$，$p<.001$）。小５より小６，小６より中１・中２の得点が低かった。これは，小５より小６，小６より中１・中２のルール違反傾向が高まることを示す。また，中１で有意な性差がみられ（$F(1, 560)=6.52$，$p<.001$），男子のほうが女子よりも得点が高かった。これは，中１では，男子よりも女子のほうがルール違反傾向が高いことを示す。

不安について，有意な交互作用がみられた（$F(3, 2142)=10.12$，$p<.001$）。下位検定の結果，男子では学年の有意な主効果がみられ（$F(3, 1116)=16.48$，$p<.001$），小５より小６・中１・中２の不安得点が高かった。また，小５より小６・中１・中２のほうが，また，中２より中１のほうが得点が低かった。これは，小６・中１・中２より小５のほうが，また，中２より中１のほうが不安傾向が高いことを示す。女子でも学年の有意な主効果が見られた（$F(3, 1026)=6.23$，$p<.001$）。小５，小６，中１は中２より得点が高かった。また，小６は中１より得点が高かった。これは，小５・小６・中１よりも中２のほうが，また，小６より中１のほうが不安傾向が高いことを示す。

3.2　よく見る番組の変容

24の要因のうち，よく見る番組について，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組を「よく見る」と回答した者の男女別の割合をTable 2，Figure 1，2に記す。

度数についての性差をχ^2検定によって検討した結果，いずれの学年においても，ドラマ，トーク番組，歌・音楽番組は，女子のほうがよく見る者の割合が高かった（Table 2）。お笑いのバラエティは有意な性差が見られなかった。

Table 2　ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組を「よく見る」とした者の割合（%）と，性別によるχ二乗検定結果

		男子	女子	χ^2検定(自由度＝1)
よく見る番組[ドラマ]	小5	30.04	56.94	74.83 ***
	小6	37.79	58.78	50.54 ***
	中1	36.24	61.63	53.73 ***
	中2	44.57	58.57	34.18 ***
よく見る番組[お笑いのバラエティ]	小5	41.28	43.47	.54 n.s.
	小6	38.57	43.67	2.92 n.s.
	中1	51.94	53.67	.35 n.s.
	中2	55.04	50.61	1.43 n.s.
よく見る番組[トーク番組]	小5	8.14	28.98	73.37 ***
	小6	12.79	40.00	101.28 ***
	中1	14.92	40.00	85.79 ***
	中2	19.57	33.47	30.73 ***
よく見る番組[歌・音楽番組]	小5	9.11	45.92	173.37 ***
	小6	17.44	55.92	174.49 ***
	中1	27.33	55.51	94.82 ***
	中2	34.88	53.88	53.73 ***

***$p<.001$

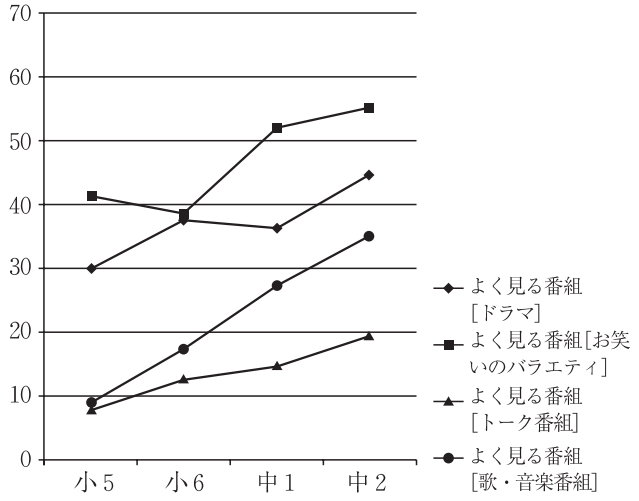

Figure 1　よく見る番組の割合（% 男子）

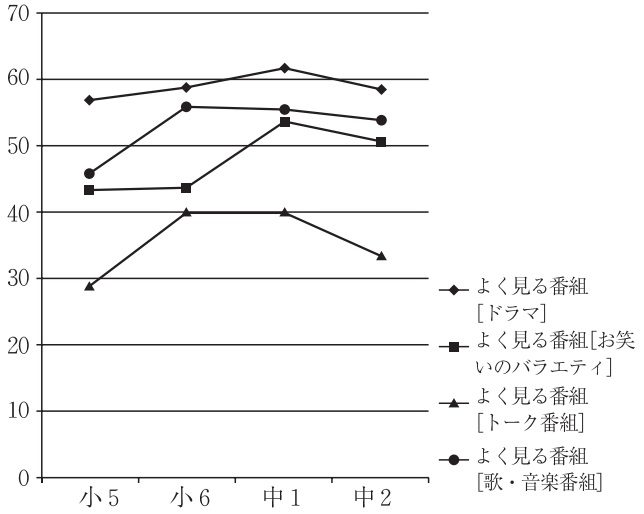

Figure 2　よく見る番組の割合（% 女子）

3.3　メディア，自己概念，学校にかかわる要因の変容

メディア要因にかかわる変数として，子ども専用のテレビ所有，子ども専用の携帯電話・PHS所有，テレビの必要性，１日当たりのテレビゲーム時間，テレビゲームの必要性（小６～中２のみ），自己概念要因にかかわる変数として，「スポーツは得意だ」，学校要因にかかわる変数として「担任の先生は自分の良いところをわかってくれる」それぞれについて性差を検討した。

子ども専用のテレビ所有，子ども専用の携帯電話・PHS所有，「スポーツは得意だ」は，「はい」，「いいえ」の選択式による回答であったため，「はい」と回答した者の割合をχ^2検定により検討した（Table 3，Figure 3，4）。

分析の結果，いずれの学年においても，子ども専用の携帯電話・PHSを持っている者の割合は女子のほうが高く，「スポーツは得意だ」と思っている者の割合は男子のほうが高かった。子ども専用のテレビ所有については，有意な性差はみられなかった。

テレビの必要性，１日当たりのテレビゲーム時間，テレビゲームの必要性，「担任の先生は自分の良いところをわかってくれる」について，学年，性別による差を検討するため，学年を被験者内要因，性別を被験者間要因とする二

Table 3　子ども専用のテレビ所有，子ども専用の携帯電話・PHS所有，「スポーツが得意」に「はい」と回答した者の割合（%）と性別による χ 二乗検定結果

		男子	女子	χ^2検定(自由度＝1)
子ども専用のテレビ	小5	24.03	22.04	.64 n.s.
	小6	25.39	21.43	2.34 n.s.
	中1	26.16	23.67	.96 n.s.
	中2	27.33	23.47	1.45 n.s.
子ども専用の携帯電話・PHS	小5	1.94	11.43	36.63 ***
	小6	5.62	18.98	42.78 ***
	中1	17.44	34.69	41.40 ***
	中2	30.81	43.67	25.22 ***
スポーツは得意なほうだ	小5	57.17	40.61	28.41 ***
	小6	50.39	34.49	29.42 ***
	中1	44.96	33.06	18.20 ***
	中2	43.22	26.73	32.65 ***

***p<.001

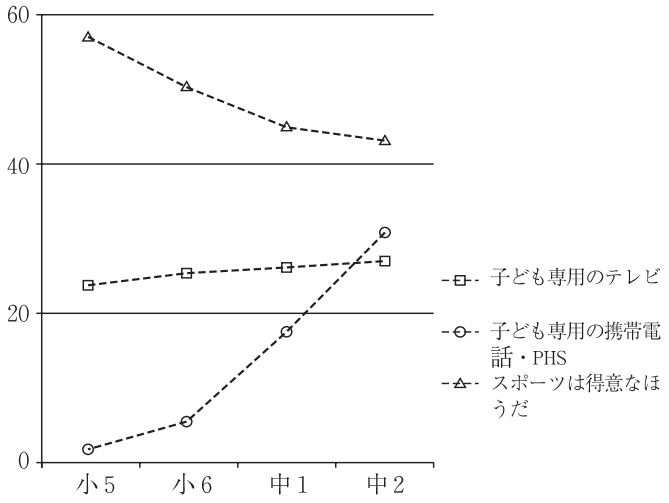

Figure 3　子ども専用のテレビ所有，子ども専用の携帯電話・PHS所有，「スポーツが得意」に「はい」と回答した者の割合（% 男子）

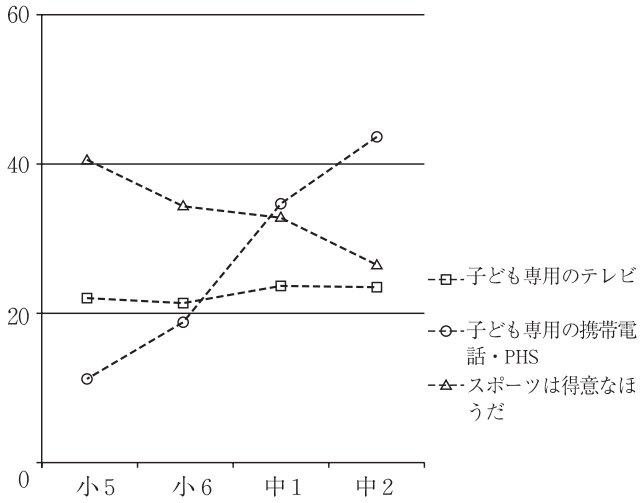

Figure 4　子ども専用のテレビ所有，子ども専用の携帯電話・PHS所有，「スポーツが得意」に「はい」と回答した者の割合（% 女子）

元分散分析を行った（Table 4）。

分析の結果，テレビの必要性について，学年（$F(3, 2145)=8.96$，$p<.001$）と性別（$F(1, 715)=11266.03$，$p<.001$）の主効果が有意であった。小5・小6が中1・中2よりも，また，女子が男子よりも得点が高かった。これは，中1・中2が小5・小6よりも，また，男子が女子よりもテレビの必要性を高く認識していることを示す。

1日あたりテレビゲームの時間は，学年×性別の交互作用が有意であった（$F(3, 1827)=2.62$，$p<.05$）。下位検定の結果，男子では，有意な学年の主効果がみられ（$F(3, 1062)=13.84$，$p<.001$），小5・小6のほうが中1・中2よりも得点が高かった。これは，小5・小6のほうが，中1・中2よりも1日あたりテレビゲームで遊ぶ時間が長いことを示す。女子でも同様の結果が得られた（$F(3, 765)=32.93$，$p<.001$）が，その差は男子よりも大きかった。また，いずれの学年においても，男子のほうが女子よりも得点が高く（小5；$F(1, 559)=85.82$，$p<.001$，小6；$F(1, 559)=57.10$，$p<.001$，中1；$F(1, 559)=102.71$，$p<.001$，中2；$F(1, 559)=135.48$，$p<.001$），その差は中1・中2で大きかった。

テレビゲームの必要性は，学年（$F(1, 1420)=18.82$，$p<.001$）と性別（$F(1, 710)=230.37$，$p<.001$）の主効果が有意であった。中1・中2が小6よりも，また，女子が男子よりも得点が高かった。これは，小6が中1・中2よりも，また，男子が女子よりもテレビゲームの必要性を高く認識していることを示す。

「担任の先生は自分の良いところをわかってくれる」について，有意な学年の主効果がみられ（$F(3, 2046)=$

Table 4　テレビの必要性，テレビゲーム，担任の先生に関する変数の平均値（*M*）と標準偏差（*SD*）および二元分散分析結果

		男子		女子		交互作用		主効果（学年）			主効果（性別）		
		M	*SD*	*M*	*SD*	*df*	*F*	*df*	*F*	比較	*df*	*F*	多重比較
テレビは必要だ	小5	2.28	.78	2.31	.78	(3,2145)	.18n.s.	(3,2145)	8.96***	小5・小6＞中1・中2	(1,715)	11266.03***	男子＜女子
	小6	2.25	.78	2.25	.76								
	中1	2.17	.77	2.19	.78								
	中2	2.13	.73	2.18	.73								
1日あたりテレビゲームの時間	小5	3.23	1.31	2.18	1.18	(3,1827)	2.62*	男子		小5・小6＞中1・中2	(1,559)	85.82***	男子＞女子
	小6	3.28	1.31	2.21	1.31			(3,1062)	13.84***		(1,559)	57.10***	男子＞女子
	中1	2.87	1.43	1.64	1.10			女子		小5・小6＞中1・中2	(1,559)	102.71***	男子＞女子
	中2	2.87	1.35	1.61	1.03			(3,765)	32.93***		(1,559)	135.48***	男子＞女子
テレビゲームは必要だ	小5					(2,1420)	2.49n.s.	(2,1420)	18.82***	小6＜中1・中2	(1,710)	230.37***	男子＜女子
	小6	2.55	.85	3.25	.76								
	中1	2.68	.88	3.40	.70								
	中2	2.67	.81	3.48	.67								
担任の先生は自分の良いところを分かってくれる	小5	1.76	.79	1.79	.80	(3,2046)	.19n.s.	(3,2046)	14.78***	小5・小6＜中1・中2	(1,682)	2.31n.s.	
	小6	1.80	.85	1.86	.84								
	中1	1.92	.79	2.02	.82								
	中2	1.93	.80	2.03	.85								

*p<.05，***p<.001

14.78，p<.001)，小5・小6は中1・中2よりも得点が低かった。これは，小5・小6が中1・中2よりも，「担任の先生は自分の良いところをわかってくれる」と認識していることを示す。

3.4　後のルール違反，不安と関連する要因

小5～中2のルール違反，不安，性別間の相関係数をTable 5に記す。各時期のルール違反，不安は，その後のルール違反，不安と相関をもつことが示された。また，女子の方がいずれの時期も不安が高く，中1でのルール違反傾向も高いことが示された。

Table 5　性別，ルール違反，不安間の相関係数

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
① 性別									
② ルール違反	小5	.05							
③ ルール違反	小6	-.03	.41***						
④ ルール違反	中1	-.11**	.28***	.39***					
⑤ ルール違反	中2	-.05	.18***	.30***	.42***				
⑥ 不安	小5	-.07**	.20***	.16***	.12***	.04			
⑦ 不安	小6	-.18***	.18***	.19***	.22***	.08*	.45***		
⑧ 不安	中1	-.25***	.05	.14***	.24***	.15***	.38***	.54***	
⑨ 不安	中2	-.25***	.06+	.16***	.18***	.20***	.35***	.41***	.55***

+p<.1，*p<.05，**p<.01，***p<.001

小5，小6，中1各時期のどの要因が，その後の不適応状態を予測するか検討するため，各時期のルール違反，不安を制御変数とした偏相関係数を算出した(Table 6)。分析の結果，以下の結果が得られた。

3.4.1　よく見る番組との関連

小5の「よく見る番組[ドラマ]」，「よく見る番組[お笑いのバラエティ]」，「よく見る番組[トーク番組]」，「よく見る番組[歌・音楽番組]」と中2の「ルール違反」との間に有意な正の相関がみられた（順に，r=.10，p<.10；r=.17，p<.001；r=.10，p<.10； r=.15，p<.01)。また，小5の「よく見る番組[歌・音楽番組]」と中2の「不安」との間に有意な正の相関がみられた（r=.15，p<.001)。

小6の「よく見る番組[ドラマ]」，「よく見る番組[トーク番組]」と中2の「ルール違反」との間に有意な正の相関がみられた（順に，r=.14，p<.10；r=.14，p<. 10)。また，小6の「よく見る番組[ドラマ]」，「よく見る番組

Table 6　T_n（小５，小６，中１）の各要因とT_{n+1}（小６，中１，中２）のルール違反・不安との偏相関係数

		ルール違反 小６	不安小６	ルール違反 中１	不安中１	ルール違反 中２	不安中２
よく見る番組[ドラマ]	小５	.17***	.08	.14**	.06	.10+	.07
	小６			.12	.11	.14+	.14+
	中１					.08	.20**
よく見る番組[お笑いのバラエティ]	小５	.09+	.05	.09+	.00	.17***	-.04
	小６			-.05	.04	.01	.08
	中１					.09	-.09
よく見る番組[トーク番組]	小５	.05	.02	.09+	.05	.10+	.05
	小６			.14+	.11	.14+	.12
	中１					.19**	.05
よく見る番組[歌音楽番組]	小５	.06	.07	.17***	.03	.15**	.15**
	小６			.06	.17**	.11	.16*
	中１					-.03	.09
子ども専用のテレビ	小５	.11*	.00	.04	-0.8	.00	.01
	小６			.16*	-.01	-.01	-.08
	中１					.07	-.05
テレビは必要だ	小５	.06	.05	.11*	.00	.03	-.08
	小６			.07	-.04	.23**	.03
	中１					.10	.16*
子ども専用の携帯電話・ＰＨＳ	小５	.04	.08	.09*	.07	.00	.07
	小６			.21**	.01	.10	.07
	中１					.07	.00
１日あたりテレビゲームの時間	小５	.06	.05	.03	.05	.01	.07
	小６			.09	.10	.03	.18*
	中１					.00	.19**
テレビゲームは必要だ	小５						
	小６			-.06	-.15+	-.02	-.19*
	中１					.03	-.15*
スポーツは得意なほうだ	小５	.09+	-.11*	.17***	.04	.17***	-.10*
	小６			.03	-.06	.18	.02
	中１					.11	-.02
担当の先生は自分の良いところを分かってくれる	小５	-.03	.02	-.03	-.06	-.09+	-.11*
	小６			-.15+	-.05	-.29***	-.15+
	中１					-.19**	-.08

制御変数は，T_n（小５，小６，中１）でのルール違反と不安。
24要因のうち，有意な偏相関係数がひとつでもみられた要因のみを記載した。
$^{+}p<.1$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

[歌・音楽番組]」と中２の「不安」との間に有意な正の相関がみられた（順に，$r=.14$，$p<.10$；$r=.16$，$p<.05$）。

中１の「よく見る番組[ドラマ]」は，中２の「不安」と有意な正の相関がみられた（$r=.20$，$p<.01$）。

小５の「よく見る番組[ドラマ]」，「よく見る番組[お笑いのバラエティ]」，「よく見る番組[トーク番組]」，「よく見る番組[歌・音楽番組]」と中１の「ルール違反」との間に有意な正の相関がみられた（順に，$r=.14$，$p<.01$；$r=.09$，$p<.10$；$r=.09$，$p<.10$；$r=.17$，$p<.001$）。

小６の「よく見る番組[トーク番組]」と中１の「ルール違反」との間に有意な正の相関がみられた（$r=.14$，$p<.10$）。また，小６の「よく見る番組[歌・音楽番組]」と中１の「不安」との間に有意な正の相関がみられた（$r=.17$，$p<.01$）。

小５の「よく見る番組[ドラマ]」，「よく見る番組[お笑いのバラエティ]」と小６の「ルール違反」との間に有意な正の相関がみられた（順に，$r=.17$，$p<.001$；$r=.09$，$p<.10$）。

小学５年生時でのドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の視聴は，それ以降，特に，中１，中２での不適応状態の高さを予測した。ドラマやバラエティをよく見ることは，それ以降，いずれの時期のルール違反

の高さをも予測した。小５，小６で歌・音楽番組をよく見ることは，中１の不安，中２のルール違反や不安の高さを予測した。

ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組を，小学校の時期からよく見る子どもは，その後，特に中学生になってから，社会的な逸脱行動を呈する可能性が高いことが示唆された。さらに，ドラマやお笑いのバラエティをよく見るということが，早期からの社会的逸脱傾向の高さを予測する結果となった。また，歌番組をよく見る子どもは，その後，不安傾向を高める可能性が高いことが示唆された。

以上の結果から，小学５年生，６年生において，ドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組をよく見ることは，その後の社会的・心理的不適応状態を高めることが示唆され，小学生の時期における視聴番組を，社会，家庭ともに慎重に検討する必要があると考えられる。

３．４．２　その他のテレビ要因との関連

小５の「子ども専用のテレビ所有」と小６の「ルール違反」（r=.11，p<.05），中１の「ルール違反」（r=.16，p<.05），小５の「テレビは必要だ」と中１の「ルール違反」（r=.11，p<.05），小６の「テレビは必要だ」と中２の「ルール違反」（r=.23，p<.01），中１の「テレビは必要だ」と中２の「不安」（r=.16，p<.05）との間に有意な正の相関がみられた。

以上の結果から，「子ども専用のテレビ所有」と「テレビは必要だ」の２つの要因が，後のいずれかの時期での「ルール違反」や「不安」と正の相関を示した。テレビへの依存度の高さが，社会的・心理的不適応を高める可能性が示唆されたが，後のどの時期の不適応を高めるのかについて一定の傾向をもった結果は得られなかった。

３．４．３　その他のメディア要因との関連

小５，小６の「子ども専用の携帯電話所有」が中１の「ルール違反」と正の相関をもった（順にr=.09，p<.10；r=.21，p<.01）。

小６，中１の「１日当たりテレビゲームの時間」が中２の「不安」と有意な正の相関をもった（順にr=.18，p<.05；r=.19，p<.01）。

小６の「テレビゲームは必要だ」は中１，中２の「不安」と有意な負の相関をもった（順にr=-.15，p<.10；r=-.19，p<.05）。中１の「テレビゲームは必要だ」は中２の「不安」と有意な負の相関をもった（r=-.15，p<.05）。

以上の結果から，小学生の時期の携帯電話の所有が中１の社会的不適応を高める可能性が示唆されたが，中２ではそのような傾向が見られなかったため，小学生の時期の携帯電話所有がその後の適応に及ぼす一貫した傾向についてはさらなる検討が必要であると判断される。一方，テレビゲームに関しては，テレビゲームで遊ぶ時間が長いほど後の不安傾向が高まる可能性が示唆されたが，小学校の時期でのテレビゲームの依存度が高いほど，中２の不安傾向が低くなるとい結果が得られた。テレビゲームは，その弊害が研念されており，本研究は，先行研究と矛盾した結果が得られた。

３．４．４　その他の要因との関連

小５の「スポーツは得意だ」は，小６，中１，中２の「ルール違反」と有意な正の相関をもった（順にr=.09，p<.10；r=.17，p<.001；r=.17，p<.001）。一方，小６，中２の「不安」とは有意な負の相関をもった（順にr=-.11，p<.05; r=-.10，p<.05）。

小５の「担任の先生は自分のよいところを分かってくれる」は，中２の「ルール違反」，「不安」と有意な負の相関をもった（順にr=-.09，p<.10；r=-.11，p<.05）。小６の「担任の先生は自分のよいところを分かってくれる」もまた，中２の「ルール違反」，「不安」と有意な負の相関をもった（順にr=-.29，p<.001；r=-.15，p<.10）。さらに，中１の「ルール違反」とも有意な負の相関をもった（r=-.15，p<.10）。中１の「担任の先生は自分のよいところを分かってくれる」もまた，中２の「ルール違反」と有意な負の相関をもった（順にr=-.19，p<.01）。

以上の結果より，小学５年生時で，「スポーツは得意だ」と認識している場合，その後のルール違反傾向の高さを予測したが，一方で，不安の低さも予測した。

また，いずれの時期においても，担任の先生が自分のよいところを理解してくれていると感じることは，特に中２時点での不適応状態の低さを予測した。

一日当たりのテレビ視聴時間や番組での暴力シーンの容認傾向，夜遅くまで起きているなどの基本的生活習慣の乱れ，学校の楽しさ，家庭での安心感，いじめの経験などは，ルール違反や不安を制御変数とした場合，その後のルール違反や不安と有意な相関をみせなかった。

4　総合的考察

これらの結果から，思春期前期における不適応状態を予測する可能性のある要因として，Figure 5に示すモデルを構築することができる。

なお，本モデル構築の元となった，要因間の有意な相関係数（Table 6）の値は，その絶対値が最も大きなものでr=-.29（p<.001），最も小さいものでr=.09（p<.10）であった。相関係数の絶対値が.20で小さな相関がみられるという基準に照らすと，本研究結果の相関係数は，非常に小さいものであると解釈される傾向がある。しかし，これらの相関係数が，その実質的な意味を考えた時に，決して小さなものではないことは，多くの先行研究でも述べられている（Bushman & Anderson, 2001; Bushman & Huesmann, 2001; Comstock & Scharrer, 2006; Hogben，1998; Paik & Comstock, 1994; Rosenthal, 1986）。

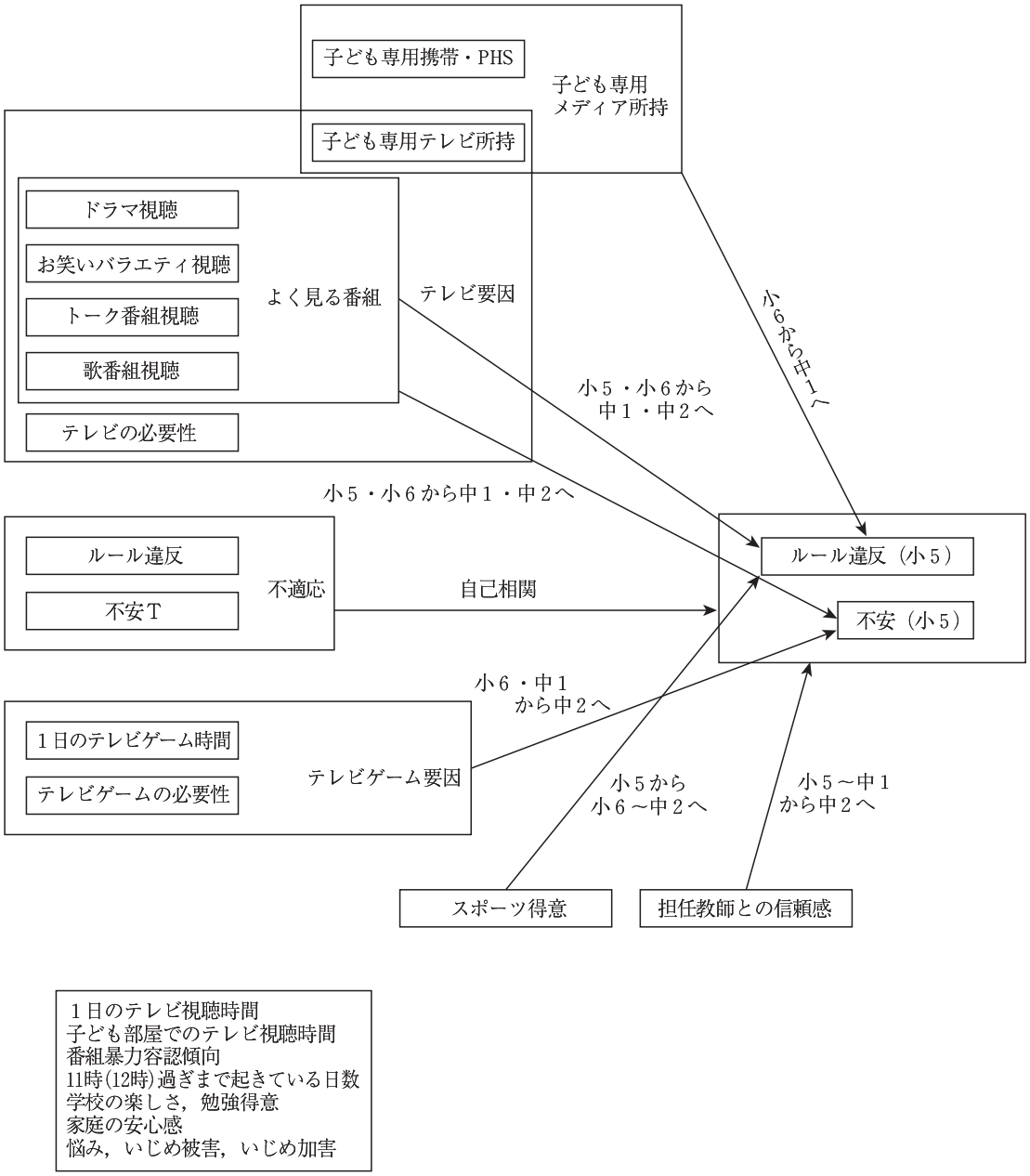

Figure 5　本研究結果から考察される因果モデル

Bushman and Anderson（2001）は，マスメディアを中心とした娯楽産業が，テレビの暴力シーンが子どもの攻撃性に与える影響を過小評価して報道していることを，実証的に批判した。彼らは，医学的な因果関係が懸念され，また，一般的に認められているもの（喫煙と肺がん，コンドームの使用とHIV感染，職場での受動喫煙と肺がん，鉛にさらされることと子どものIQ，ニコチンパッチと禁煙，カルシウム摂取と骨密度，アスベストにさらされることと喉頭がん等）の相関係数と，メディアの暴力と攻撃性の相関係数を比較し，メディアの暴力と攻撃性との相関係数は，喫煙と肺がんに次いで２番目に大きいことを示した。

Rosenthal（1986）は，相関係数の実質的な意味を多角的に検討する中で，プロプラノール薬のプラシーボコントロールの臨床実験が，相関係数r＝.04の状況で倫理的な問題から中断された例を取り上げている。これは，100人中４人が，治療方法により異なる結果になることが示されたためであるとされている。その上で，メディアでの暴力シーンをよく見ているかどうかと，子どもの攻撃性との相関係数がr＝.16とr＝.30の場合について，前者は100人中16人が，後者は100人中30人が，その攻撃性の高さに，メディアの暴力シーンをよく見るか見ないかの影響を受けることを算出し，メディアの影響の実質的大きさを示した。さらに，縦断的な分析において，以前の攻撃性が後の攻撃性の強い規定要因となるため，以前の攻撃性を統制した時に示されるメディア要因と攻撃性との偏相関が女子で.14，男子で.09である例をとりあげ，その影響力の大きさを示すとともに，メディア要因の影響力をより妥当なものとしていると論じている。以上のように，本研究で得られた偏相関係数は，実質的に大きな影響力をもつものと解釈することが妥当だと判断される。

Figure 5より，児童期後期におけるドラマ，お笑いのバラエティ，トーク番組，歌・音楽番組の視聴は，特に中学生になってからのルール違反傾向や不安傾向といった，社会的・心理的不適応を高める要因として機能する可能性が示唆された。スポーツの得意不得意や，担任の先生から認められているという認識以外の要因は，小学５年生から中学２年生にかけてあまり安定した影響力をみせなかった。その中で，「よく見る番組」の要因は，小学校５年生から中学２年生にかけて社会的・心理的不適応状態に比較的安定した影響力を示したことから，その影響が無視できないものであることが推測される。

番組の嗜好は，幼児期から生じている（Comstock & Scharrer，2006）。それは個人のパーソナリティや物事の捉えかた等により異なる傾向がみられる（Weaver，2003）が，本研究では，それまでのルール違反傾向や不安傾向を統制した上でも関連がみられたことから，特定の番組を嗜好する個人的要因だけでなく，特定の番組を視聴することの長期的影響の可能性も明らかとなった。

本研究では，「よく見る番組」以外にも，中学１，２年生のルール違反や不安傾向を予測する小学５，６年生の要因がいくつか見出された。その中でも，担任の先生が自分のよいことを分かってくれているという意識は，社会的にも心理的にも不適応状態を低くすることが安定して示された。小学校高学年から中学生の時期は，思春期に入る時期であり，自分の親からの自立を大きな課題とする時期でもある。その時期に，友だちと同程度，親以外の大人から認められているという意識が子どもの適応状態を安定させるものであることが本研究でも示された。

また，小学５年生の時期に「スポーツは得意なほうだ」と認識している子どもは，その後の不安傾向が低いが，ルール違反傾向は高まる傾向が示された。これは，児童期後期におけるスポーツへの自信の独特の機能を説明していると捉えることができる。児童期後期におけるスポーツコンピテンスの高さは，学業コンピテンスや社会的コンピテンスとともに，自己概念全体に重要な機能を果たしており，安定した自尊感情を形成する（榎本，1998）。と同時に，スポーツに自信のある子どもは，外向的でもあり，問題をおこす場合も，内向的な問題よりはむしろ外向的な問題を起こす傾向が高いことが推測される。

担任の先生からの承認感やスポーツへの自信以外にも，テレビゲームへの依存心や子ども専用の携帯電話の所有などの要因がその後の社会的・心理的不適応を予測する傾向がみられたが，小６から中２まで一貫して長期的な不適応状態を予測する結果はみられなかった。さらに，本研究では，24の要因について，ルール違反や不安の予測要因となり得るかを検討したが，ルール違反や不安の自己相関を考慮した場合，有意な相関がみられなかった。

不適応を予測する要因は，発達の各段階により異なり，時期ごとに影響力を持つ要因もあれば，生涯にわたり影響力をもつ要因もある（U. S. Department of Health & Human Service, 2001）。よく見る番組の種類がルール違反や不安傾向に対して，弱いながらもある程度一貫した予測要因となることが示されたことは，児童期における視聴番組が子どもの発達に対して無視できない影響をもつものであることを裏付けていると考えられる。番組製作者も，子どもに見せたい番組をリストアップしたり，番組製作上のモラルを考慮するなどの対策をとっているが，これらの対策が必要なものであることが本研究からも示された。さらに，家庭においても，特に児童期までの子どもに対しては，番組を十分に吟味した上で視聴することが求められるだろう。

なお，本研究は，2001年から2004年に実施した調査結果に基づいた分析である。子どものテレビ視聴時間に大きな

時代の変化は見られないものの，携帯電話を始め，他のメディア環境はめまぐるしく発展し，子どもへの普及率も高まっている。そのため，本研究で要因として見出された「子ども専用のPHS・携帯電話」の影響力は，今日では大きく異なる可能性があり，新たなデータに基づいた分析が求められる。さらに，本研究は縦断的な分析をおこなってはいるものの，それぞれの要因を構成する項目が少ない。本研究の分析の範囲内では，無作為抽出法によって得られたサンプルからの結果として，その妥当性が十分であると思われるが，今後は，視聴番組に関する変数をより安定させた上での分析が求められる。

引用文献

Anderson, C. A., Berkowitz, L., Donnerstein, E., Huesmann, R. L., Johnson, J., Linz, D., Malamuth, N., & Wartella, E. (2003). The influence of media violence on youth, *Psychological Science in the Public Interest,* 4, 81-110.

Anderson, D. R., Huston, A. C., Schmitt, K. L., Linebarger, D. L., & Wright, J. C. (2001). Early childhood television viewing and adolescent behavior. *Monographs of the Society for Research in Child Development,* 66.

Arnet, J. J. (2007). *Encyclopedia of children, adolescents, and the media.* California: SAGE Publications.

Austin, E. W., & Knaus, C. S. (2000). Predicting the potential for risky behavior among those “too young” to drink, as the result of appealing advertising. *Journal of Health Communication,* 5, 13-27.

Bushman, B. J., & Anderson, C. A. (2001). Media violence and the American public: Scientific fact versus media misinformation. *American Psychologist,* 56, 477-489.

Bushman, B. J., & Huesmann, L. R. (2001). Effects of televised violence on aggression. In D. G. Singer, & J. L. Singer (Eds.), *Handbook of Children and the Media.* (pp.223-254.) California: Sage.

Comstock, G., & Scharrer, E. (2006). Media and popular culture. In K. A. Renninger & I. E. Sigel (Eds.), *Handbook of Child Psychology. Vol. 4. Child Psychology in Practice.* (pp. 817-863.) New York: Wiley.

榎本博明．(1998)．「自己」の心理学―自分探しへの誘い．サイエンス社．

Hawkins, R. P., Pingree, S., Hitchon, J., Gorham, B.W., Kannaovakun, P., & Gilligan, E. (2001). Predicting selection and activity in television genre viewing. *Media Psychology,* 3, 237-263.

Hogben, M. (1998). Factors moderating the effect of televised aggression on viewer behavior. *Communication Research,* 25, 220-247.

放送と青少年に関する委員会．(2005)．青少年へのテレビメディアの影響調査～子どもを保護者とともに追跡した「4年間調査」～．

国立教育政策研究所．(2008)．TIMSS2007　国際数学・理科動向調査の2007年調査（TIMSS2007）国際調査結果報告(概要)．(http://www.nier.go.jp/timss/2007/gaiyou2007.pdf　2009年8月25日引用)

Muto, T., Sumiya, S., & Komaya, M. (2005). Longitudinal research on children’s vulnerability to television. In D. W. Shwalb, J. Nakazawa, & B. J. Shwalb (Eds.), *Developmental psychology: Theory, practice, and research from Japan.* (pp.43-63). Greenwich: Information Age Publishing.

日本民間放送連盟．(2008)．放送と青少年／青少年に見てもらいたい番組（2008)．http://nab.or.jp/index.php?%CA%FC%C1%F7%A4%C8%C0%C4%BE%AF%C7%AF%2F%C0%C4%BE%AF%C7%AF%A4%CB%B8%AB%A4%C6%A4%E2%A4%E9%A4%A4%A4%BF%A4%A4%C8%D6%C1%C8#keb699d3（2008年7月31日引用)

Paik, H., & Comstock, G. (1994). The effects of television violence on antisocial behavior: A meta-analysis. *Communication research,* 21, 516-546.

Rosenthal, R. (1986). Media violence, antisocial behavior, and the social consequences of small effects. *Journal of Social Issues,* 42, 141-154.

角谷詩織・無藤　隆．(2003)．小学5年生における適応とメディアの関わりのリスク要因分析．　子ども社会研究，9，1-13．

U. S. Department of Health & Human Service. (2001). Risk factors for youth violence. In Youth Violence: *A Report of The surgeon general. Chapter 4.* (http://www.surgeongeneral.gov/library/youthviolence/chapter4/sec1.html 2008年8月30日参照)

Weaver, James B. III. (2003). Individual differences in television viewing motives. *Personality and Individual Differences,* 35, 1427-1437.

The Longitudinal Influence of Television Programs Watched in Childhood on Social and Psychological Maladjustment in Puberty

Shiori SUMIYA* · Takashi MUTO**

This study examined the influence of television programs on teens' social and psychological maladjustment with taking into account of other risk factors. From February 2001 to February 2004, the survey administration was conducted once every year. At the time of initial data collection, 1,006 fifth graders were chosen at random in the Tokyo metropolitan area to participate in the survey. We assessed participants' social and psychological maladjustment by social rule-breaking and anxiety. Participants' media use, including television, video games, and mobile phones, school adjustment, friends bullying, family life, life habit, and self competence were also assessed. To examine the factors influenced to the social and psychological maladjustment, longitudinal partial correlations from fifth, sixth and seventh grades to seventh and eighth grades were conducted. As the results, watching dramas, comedy shows, talk shows, and music programs, in addition to high sport self competence, low trust to classroom teachers, and long time play with video game during fifth and sixth grades heighten the social and psychological maladjustment in seventh and eighth grades.

* School Education ** Shiraume Gakuen University